

鳥観察関連でウトウの名を聞いたことがあるが、漢字の「善知鳥」と同じものだとは全く気付かなかった。ただし、広辞苑は突起、鳥のウトウ、善知鳥の三者の関連については何も教えてくれない。

広辞苑で「善知鳥」の隣に「うとうやすかた（善知鳥安方）」という見出しがあり、陸奥の国外ヶ浜にいた鳥の名前だそう。親鳥が「ウトウ」と鳴くと子鳥が「ヤスカタ」と答えるという。実在の鳥ではあるまい。

広辞苑には「うとう（善知鳥・鳥頭）」という見出しもあり、上記の能曲の説明があった。陸奥の国外ヶ浜の漁師が「善知鳥」を殺したが、その罪で地獄で化鳥に苦しめられるという話だそう。この善知鳥は上の善知鳥安方であろう。

日立デジタル平凡社の百科辞典では、青森（市）の旧名は善知鳥村だったのが、1624年に青森と改めたという。

検索エンジンで「善知鳥」を探してみたら「SL善知鳥峠号」というのが見つかった。「SL善知鳥峠2号」は中央東線旧線を走るらしい。鉄道ファンには有名なのかも知れない。

HP「中野康明の雑学ページ」から

うとう【善知鳥】

①ウミスズメ科の鳥の名。北海に住み、小鴨くらい大きさ。

②「うとうやすかた」の略。

1994年 旺文社古語辞典 第6版

うとうやすかた【善知鳥安方】

陸奥の国（青森県）外ヶ浜にいたといわれる鳥。親が「うとう」と呼ぶと、子は「やすかた」と答える。漁師がそれを利用して親鳥の声のまね、子をとらえると、親鳥は血の涙を流して鳴くという。

1994年 旺文社古語辞典 第6版

うとう^{うとう}考（菅江真澄読本）

千畑町金沢東根には「善知鳥」があり、「善知鳥川」が流れている。《月の出羽路仙北郡》十四卷の真筆本には「空虚阪昔なし、今六戸」と

記しているのみである。真澄は別本を書き、その中には善知鳥^{うとう}についての自説を載せていたのである。

後藤宙外^{うとう}の見たものはその写本であったわけである。書写した人は「菅江翁^{いづく}の日、おのれ陸奥、出羽を三十年あまりを経て、世に疑しき事どもは、蝦夷が千嶋の限り尋ね見めぐりぬ。品々の書集める中に、《善知鳥》といふ書を書けりしを、人の借りて失ひにき。そをさらに委曲に云ひ出でんこともいと難ければあらましをいはん。蒼柱^{あおもり}の湊、外ヶ浜、松前の浦をめぐれど、出崎を善知鳥といへる方言なし」と記してあったという。以下宙外の記した《善知鳥考》を紹介しよう。

（原文のまま）

一 是は江戸ノ曲亭、滝沢解（馬琴）の『烹雜記』の説なり 一 是を考ふるに、陸奥の浦々にても、木^{うつぼ}を空木といひ、しとと踏めば鳴る地あるを空^{うど}なりと云ふ。坂などにもいと多し。そを窠坂^{うとうざか}といふ。さし出たる所をうとふといふは東国の方言なりといへるは未だ聞かぬ事なり。

善知鳥は外ヶ浜にもいといと稀なり。今、松前の小島にこの鳥多く、昼は海にあさり、暮ゆく頃は蠅のむらがるやうに、小島に帰りて皆穴に入て寝ぐら求めぬ。明くれば窠^{あな}より出でて海に入る。さりければこの鳥を窠鳥^{うとう}といへり。元、空ふより出たる鳥の方言なり。また鳩鳥^{うとう}と書ける文字もいちじるしく知られたる也。宝暦、明和（1751～1772）の頃ならむ、

この鳥を捕りて吸ひ物とせし事流行りたりしが、いつとなく止みにき。又津軽の深浦の友吾といふもの、二人乗船にて、松前に渡りて、小島に吹き寄せられ、糧なければ善千鳥の多かるを見て、これを食はんとて、夕暮、海より島に帰るを手拭もて打落とす、この鳥をあぶり食ひて二人の命は生きたり云々。

松前にては小島鳥といふ。この鳥の糞にて小島草〔この草を元禄の頃、皇都に奉り、大内にめされて、璧玉草^{へきぎよくそう}という名を給ひしよし。この草、縷斗草^{おだまきぐさ}といふに似たり。□□の花咲きて、大に事